有翼馬の表現にみられる文化交流

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2920

「有翼馬の表現にみられる文化交流」

宮澤 麻理

馬に鳥の翼をつけた、想像上の有翼獣である有翼馬の表現は、古くから各地でみられる。特に有名な有翼馬はギリシア神話に登場するペガソスであり、多くの作品に表現されている。そのためか、地中海世界以外の地域にみられる有翼馬の表現は単純にペガソスと同一視されるか、あるいは関連付けられて考えられてきており、ユーラシア大陸における有翼馬の表現に関する専門的な研究は、筆者が見た限りでは行われていない。馬に翼をつけるという有翼馬の表現が各地で独自に作り出される可能性は十分に考えられるため、全ての有翼馬の表現を文化的つながりで解釈することには問題がある。そこで本稿では、有翼馬の表現について、特徴的である翼の形状に着目し、各地の表現を分析、比較することで、各地域の特徴や地域間の文化交流について考察を行った。

まず、地中海世界、西アジア、中央アジア、中国の各地域における有翼馬の表現について、具体的な資料を挙げて分析を行い、それをもとに地域間にみられる交流について概観した。その結果、地中海世界でペガソスが多く表現されるようになる時代は紀元前７世紀以降であるが、西アジアにおいては紀元前二千年紀後半にはすでに有翼馬の表現がみられ、その翼の形状をみても、表される題材をみても両者に共通点はみられず、有翼馬がそれぞれ独自に作られた表現であることが分かった。また、中国においては前漢に有翼馬の表現が現れるが、翼の形状を比較するとこの時代の地中海世界の有翼馬の翼とは明らかに異なっており、西アジアや中央アジアでは有翼馬の表現が途切れていた時代であることから、中国においても独自に有翼馬表現が生み出されたということが明らかとなった。

西アジアにおいて、アケメネス朝に特徴的な反り返る翼表現は、アルカイック期の地中海世界の有翼馬の翼表現に類似しており、この影響を受けたものと考えられる。地中海世界ではその後反り返らず自然な形の翼が主に表現されるようになるが、西アジアでは翼が反り返る表現様式が継続して使用され、伝統的なものとなっていた。ササン朝時代に増加する有翼馬の翼にもこの形の翼が表現されている。ササン朝の時代にはいわゆるシルクロードによる東西の交易が行われていたが、反り返った翼をもつ有翼馬の図像も中央アジアを経由し唐代の中国に流入した。そこには漢代に中国で独自に生み出され、細長く線に近い翼を持つ有翼馬が存在していたため、唐代の中国では、幅が広く先端が反り返った翼を持つ有翼馬と、細長く火炎文のような翼を持つ有翼馬の二つの系統が共存することとなった。

画象石にみられる有翼馬（江蘇省）

この時代に中国から日本にもたらされた法隆寺などの文物には、これら二つの系統の有翼馬をみることができる。

本稿では扱う地域が広範囲であったため、論をあまり深く掘り下げることができなかった。有翼馬の持つ象徴的意味や他の要素について、より詳細な分析を行うことで、論を補うことができると思われる。